

平成二十四年度

目黒星美学園中学校入学試験（国語）

第一回

※ 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号
氏 名

「一」次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「俺」は半人前の落語家である。そこそこ人気はあるのだが、今はスランプで悩んでいる。ひょんなことから、話すことに困っている四人の変わり者たちに話し方を教えることになり、落語教室を始めたが、落語など覚えてもそれぞれが抱えている問題を解決すると思えず、もう終わりにしようと思心を決めながら、ぼんやりと村林の嘶を聞いていた。

村林が突然しゃべるのをやめた。どうしたんだと尋ねると、

「ぜんぜん聞いてへんやないか！」

怒って赤い顔をしている。

その通りなので、悪かったと謝ると、

「俺、全部、覚えたのに」

うらめしそうに目を細めた。

「ゆうべ、家でしゃべって見たら、どんどん最後までいくやんか。びっくりしたわ。こら忘れんと思て、今日はスイミング・クラブさぼって、公園の人のおらんとこで練習してきたんや」

「公園？　どこの？」

「そんなん、どうでもええやん」

村林は口を尖らせて、ふんと横を向いた。機嫌をそこねたヒナ鳥みたいに見えた。いつもより少しかわいく見えた。

「へえ。覚えたのか。そうか」

さつき、井の頭公園で見かけた子供は、やっぱり村林だったのかもしれないと思った。

「落語って面白いかな？　水泳より好きかな？」

真剣に尋ねたのに、つまらんこと聞くなあと溜め息をつかれてしまった。

「落語は落語。水泳は水泳」

思いきり馬鹿にしたように答えたあと、ひょいと付け加えた。

「百メートル泳げる小学生は結構いてるけど、落語なんか出来るのは、おらんやろ」

「まあね」

うなずきながら、落語って何かをちゃんと知っている小学生がどれだけいるだろうと考えた。

「友達に、落語を習ってるって話するか？」

「するわけないやん」

「なんで？」

「笑われるわ」

「じゃ、自慢にならないだろう」

少しムツとして突っ込んだ。

「どこで威張るんだよ？　俺は百メートル泳げないけど、落語はしゃべれるってさ」

「ゆうとくけどな、俺、二百メートル、泳げるで。クロールも平泳ぎもいけるで」

「そりや悪かったな」

「悪いわ」

「家で威張るのか。お母さんの前でしゃべって聞いてもらうんだな」

「聞かへんがな」

妙に大人びた冷めた目になった。

「落語をやれ、ゆうたんはお母さんやけど、ほんまは東京の言葉を覚えてほしかったみたいやな。ぜんぜん聞いてくれへんわ」

ドキリとした。学校で、関西弁を笑われていじめられているのだろうか。聞いてみようとする、

「俺、ウンコする時、落語の練習するんや。お母さん、めちやめちや怒りよるで。トイレから変な声が聞こえる、気味悪いイテ」

ニタリと笑いやがった。

「だいたい落語やると、勉強せい、ゆうもんな。俺、思いきりやかましくしゃべったるねん。お母さんがテレビ見てる隣でやったるねん」

「迷惑な奴だな」

「戦いや」

「戦いばかりだな」

負けず嫌いも反骨精神もいいが、疲れやしないかと心配になった。

「そやけど、俺、」

自分に問いかけるように首をひねった。

「ちゃんと覚えたもんな。嫌味でやるには長すぎる思わんか？」

「思うわね」

突然、十河が返事をしたので、皆、びっくりした。落語以外では口を開かないダンマリ猫が何を思ったか、

「本当に覚えたんなら、やってみてよ」

と挑戦的な口調で言うので、

「ええよ」

村林は目を丸くしてうなずいた。

② ひよっとして、この二人にはライバル意識などというものがあるのだろうか。十河の顔つきは真剣だし、村林は得意そうだし、どうも、そうらしいと妙な気分になってくる。

「ああ、惜しいなあ」

急に村林は舌打ちした。

「湯河原のオヤジ、肝心な時に、いてへん」

「あの人さア、どうしたんだろうねー」

誰かが湯河原の名前を持ち出すのを待っていたかのように、良が言った。すると、皆、良に視線を集めて沈黙した。

「どうしたんだろうねー」といつしよに声を合わせて繰り返すような沈黙だった。

俺もちょうど湯河原のことを思い出していた。湯河原がいたら、また、生意気な小僧だと村林と喧嘩するだろうかと思っていた。

④ 決して仲良しの集まりではない。喧嘩の火種があちこちでブスブスくすぶっているような物騒な関係である。それでも、やはり、一人の不在が気になる。いないよりは、いたほうがいい。もし、落語教室をやめると言ったら、村林は、十河は、良は、がっかりするだろうか。さびしいだろうか。

三人の顔をそれぞれゆつくりと眺めた。

村林は落語を好きだと言ってくれた。

俺が頼んだわけじゃないし、期待したわけでもないが、えらく長い嘶を覚えた。村林だけじゃない。十河は村林の半分の長さだが、とくに嘶は覚え、仕草も板についてきた。良もだいたいぶつかえずにしゃべれるようになっていく。彼らの人生の問題はともかく、落語は確実に目に見えて上達している。そして、そのことを彼らは喜んでいく。俺が思っていたより、ずっとずっと喜んでいく。

「よーし。聞いてやるぜ」

俺が村林をうながすと、

「なんや。えらそうやんか」

坊主は鼻をふーと鳴らしてから、もったいぶって、しゃべりはじめた。

お世辞にも、うまい嘶じゃなかった。素人で子供だということをさっぴいても、飛ばしたりつかえたり、間違えたり、身振りは大きい

だけでめっちゃめっちゃだし、なにより、キメの台詞で先に自分が笑ってしまう。

しかし、実にうれしそうにしゃべっていた。自分の言葉に楽しんで、ほくほくとやっていた。何べんも繰り返して聞き、しゃべっているから、もうたいがい飽きて、いやになっていそうなのだが、はずんだ表情で生き生きと口を動かし、手を動かす。よく笑う。

いい眺めだった。

村林がしゃべるのを見てみると、俺はなんとも幸せな気分になってきた。

ほかの聞き手も同じ気持ちらしく、十河が珍しく柔らかい眼差しで、良が心配事などないような

Ⅱ

眼差しで、村林の一挙一動

をじつと見守っていた。

この六畳の古びた茶の間は、のどかな幸福の空間だった。良い笑いがあつた。自然な人の和があつた。現在にも未来にも、
Ⅲ 光

⑤ 子供が気まぐれに嘶を一つ覚えてみた——それだけのことなのに、その事実は俺にとっても重かった。

十歳のガキが、母親にいやな顔をされながらも、塾や水泳教室の合間をぬって、三十分の嘶を覚えきるのなら、二十六歳の本職は甘ったれたことを言っちゃいられない。自信がないなどと泣いていられない。ないものは、作るしかない。作るには、とりあえず努力するしかない。結果がどう出るかなど知ったこっちゃない。今月は仕事が少なく、いやというほど時間があるので、出来る努力を地道にやることにした。

（『しゃべれどもしゃべれども』 佐藤 多佳子）

問一 線部 a～d の意味として適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a うらめしそうに

ア うらやましそうに

イ 不満そうに

ウ くやしそうに

エ 裏切られたように

オ ねたましそうに

b 反骨精神

ア 権力に抵抗する強い気持ち

イ どんな苦勞も乗り越える強い気持ち

ウ 何にでも反抗するひねくれた気持ち

エ 少数意見をたらぬき通す気持ち

オ 相手を説得しようとする忍耐強い気持ち

c 板についてきた

ア 舞台に立てるくらい上達してきた

イ 型にはまって正確さが出てきた

ウ 堂々として自信があふれてきた

エ なじんで不自然でなくなってきた

オ 言葉とぴったりと付いてきた

d ほくほくと

ア じっくり温めるように イ 勝ちほこったように ウ うれしそうに エ 口当たりよく オ 自信満々に

問二 — 線部①「つまらんこと聞くなあ」とありますが、そう言った村林の気持ちを説明したものととして適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 違うことについて話したいのに、いつもまったく的外れな質問をしてくることにイライラして八つ当たりしたくなった。
イ 小学生にとつて落語が出来ることなど意味がないとよく知っているのに、なぜわざわざ聞くのかと不思議に思った。
ウ 「面白い」と「好き」というのは、まったく別の気持ちなのに、それを同じと考えていることに大人の愚かさを感じた。
エ 落語のほうが好きだと言ってほしいのだろうと思うが、あまりに真剣な様子で聞くので少しうんざりした気分になった。
オ 大人のくせに、落語と水泳はまったく別物で、比べるものではないということがわからないことにあきれた気持ちになった。

問三 — I に入る適切なことばを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 関西弁、向いてるんとちがうかな? イ 結構、がまん強いんとちがうかな? ウ 落語、好きなんとちがうかな?
エ なんでこんなことにはりきってるんかな? オ 誰に勝ちたくてやってきたんかな?

問四 — 線部②「そうらしい」とありますが、どうであるらしいのですか。「……らしいということ。」に続く形で、十字以内で答えなさい。

問五 — 線部③「沈黙した」とありますが、この「沈黙」が意味することを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 湯河原の名前が出たことで、また物騒な喧嘩が起きるのではないかと警戒しているということ。
イ 空気を読めない良に対して、出していけない名前であることをそれとなく示すということ。
ウ 自分たちが原因で湯河原が来なくなったことを「俺」にさとられないようにしているということ。
エ 今日来ていない湯河原のことを、皆、ことばには出さなかったが、同じように気にしていたということ。
オ 普段、自分から話すことのない良が口を開いたので、皆、おどろきながらも続きを待っているということ。

問六 — 線部④「喧嘩の火種があちこちでブスブスくすぶっているような物騒な関係」とありますが、この状態に最も近い意味を表す四字熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一喜一憂 イ 一進一退 ウ 一触即発 エ 一刀両断 オ 一部始終

問七 — II・III にあてはまることばを次の中から選び、記号で答えなさい。(同じことばを二度使ってはけません)

ア きびしい イ 明るい ウ 暖かい エ 鋭い オ まぶしい カ さびしい

問八 — 線部⑤「とても重かった」とありますが、それはなぜですか。理由として適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 悩んでいた自分の気持ちに大きな影響を与えたから。
イ これからの努力の日々を考えてゆううつになったから。
ウ 村林の人生を変えてしまったことに気付いたから。
エ 子どもに落語を軽く扱われてひどく心が傷ついたから。
オ 子どもにも出来ることが出来ない自分が情けなかったから。

問九 — 線部⑥「結果がどう出るかなど知ったこっちゃない」とありますが、「俺」の気持ちを説明したものととして適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今まで出来ることはやりつくし、もうどうしようもないので、どうにでもなれと投げやりになってしまった。
イ 意味があるか、結果がどうなるかなど気にしないで、今出来ることをしっかりやればよいのだと吹っ切れた。
ウ 結果を出さなければと緊張してきたが、十歳の子どもにも出来ることを思い出して、自信を取り戻した。
エ 今月は仕事がなく、結果を求められることもないので、あせらずに着実に成長していこうと決心した。
オ 指導者として結果を出すことに苦労してきたが、楽しんでやればよいとわかったので気が楽になった。

問十 本文の場面から読み取れる人と人のつながりについての説明で、適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人と人は言葉を通して理解し合うものである。言葉がうまく使えない人は使えるように努力しなければならない。
イ 子どもががんばる姿はとげとげしい空気を和らげる効果があるので、喧嘩ばかりする集団には子どもを必ず入れるとよい。
ウ 大人と子どもは思いがすれ違ふことも多いが、お互いにしんぼう強く話を聞くことによつて分かりあうことができる。
エ 気が合う友達でなくても、一緒に過ごすはずの人がいないのはさびしいものであり、ただそこにいることにも大切な意味がある。
オ 人と人との出会いは偶然が生み出すものだが、それによつて思いがけない力が引き出されるので常に新しい挑戦を続けるべきだ。

【二】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある日わが街の駅のホームで、たくさんの絵入りポスターの中に字だけのこんなポスターがまじっていた。
わたしは興味を覚え、さっそく手帳に写し始めたが、写しててこんなポスターを作らざるを得なかった担当者の苦しい顔が見えるように思い、なんとなくおかしくなった。

駅や車内で 空き缶を ポイ捨てしている人がいた。 どうしますか	注意する ゴミ箱の場所 を教える ゴミ問題につ いて説教する 自分の方に転が つて来ないよう 祈る 拾ってゴミ箱に 捨てる べつに何とも思わない マナーって何だろう	J R
--	---	-----

むろんこんな事態が起こらぬようにするには、あらゆる駅のホームに缶ジュースの販売機を置かなければいいのである。簡単な話だ。

が、それでは鉄道弘済会（と今でも言うのかどうか）か何か、とにかく業者が困るのであろう。そこでマナーに訴えるという一種の意見広告を作ったわけだろう。むなしいことは重々承知の上で。

実際に電車に乗っていて、空き缶があちこちへころころ、こつちへころころ転がり続け、乗客はみんな知らん顔をしているという不快な体験は、誰もがしている。それどころか缶ジュースをちびちびすりながらマンガ雑誌を読み、やがて平気でその空き缶を床に置いて出て行く若者が跡を絶たない。が、それに対して誰も注意しない。たまに見るに見かねた老人が（わたしもその一人）降りる時不快そうにそれをつまんで、駅のゴミ箱に捨てるぐらいのものだ。

缶ジュースの自動販売機なんてものが出現する以前は、**A** こんな問題は生じなかつたわけである。が、いつごろからそれが発明され設置され、街のいたるところに見かけ出した時から、人はそれなしにはいられぬようになったらしい。わたしの住む郊外の街でも駅の周辺に無数の自動販売機が立っていて、見ていると駅からぞろぞろ出てきた乗客の何人かはそこから缶を出し、飲みながら帰って行く。自宅までの十分か十五分家へ着くまで我慢できないのか、と昔者のわたしなどは歯がゆく思うが、そのわずかの距離でも我慢できないでただちに欲望を満たすのが、今の日本人なのだ。

B 彼らは飲み終えると他人の家であらうと何であらうとお構いなく、飲み終わった所にそれを捨てていく。駅から三、四分のわたしのところなどちょうど飲み終わる時らしく、堀ぎわにその捨てられていない日はない。わが住む街横浜市でもさすがにそれを見かねたか、先年「ポイ捨て禁止条例」なるものを作ったが、事態は一向に変わらない。

わたしはそこに現代特有の病を見るような気がしている。**C**、まず新しい企業の製品が世に出現し、それが人間の健康や教育のためにいいのかわいのか、生きるために必要なかどうか検討することもなく、その**I**のゆえに受け入れられ、流行し、誰もがそれにどっぷりつかってしまう。物が先に世に現れ、人は無批判にその流行に従って、それを使うマナーなんてものの生じるひまがないのである。ある日気がついたら、草むらは空き缶だらけになってしまっていたというだけだ。

あるものに対して社会が合意して認める取り扱い基準、行動基準が出来上がらぬうちに、新しい物だけが先に横行し始め、人の側が事態に追いついていけないということが、いろんな面で起こっているのである。といって今さらその物を社会からなくさせるわけにもいかないから、やむを得ずおそまきながら駅のポスターのように「マナーって何だろう」と人間のふるまい方を問うことになる。こんな例はほかにもいくらかある。いや、現代はすべての面で物の方が先行して、人間はあとから物を追っかけ続けている時代だ、と言ってもいいのかもしれない。

昔からあるものならば、人はそれに対してどう対処すべきかを知っている。何はいい、何は悪いと言うことができる。何に対してはどうすべきかという決まりがある。ことに對する作法が決まっている。

D、お茶ならば、これには昔から茶道というものがあつて、そのいれ方、飲み方、道具の扱い方、立ち居ふるまいの仕方など、

すべてきちんと作法が作られている。人はそれに従って行動すれば笑い者にもならず、人と和し、同じ一つの世界に遊ぶことができる。が、缶ジュースなんてものはここ数十年間に初めて出現したものにだけに、どう取り扱っていいか決まりもなく、ただ欲望のままにそれに手を出し、用が終われば捨てる。扱いは人それぞれの良識にまかされているわけで、結果を見れば缶ジュース愛用者の中にはⅡことが判明しただけである。ともかく今や街中いたるところに空き缶がポイ捨てされているありさまなのだから、それに対しては駅のポスターのように生ぬるくでなく、むやみに空き缶を捨てるなとでも言うしかないのである。

(『現代人の作法』 中野 孝次)

問一 A D に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ もちろん ウ ところが エ しかも オ ところで カ つまり

問二 線部 a c の意味として適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 見るに見かねた

ア 見たこともない イ 見る価値もない ウ 見ていてたえられない

エ よく目が見えない オ 見たいと思わない

b 歯がゆく

ア もどかしく イ 心がちくちく痛く ウ 心が折れそうに エ 腹立たしく オ 気持ち悪く

c おそまきながら

ア おそまつでも イ 時に遅れても ウ いやいやながら エ わけもなく オ 時代遅れでも

問三 線部①「こんなポスターを作らざるを得なかった担当者の苦しい顔」とありますが、どうして担当者は苦しい顔になるのですか。その理由を説明した次の文の空らんを、本文中の担当者の気持ちを表すことばを用いて二十字以内で補い、文を完成させなさい。

ポスターを作っても、どうせポイ捨ては

(から。

問四 線部②・③の「それ」が指している内容をそれぞれ二十字以内で書きなさい。

問五 線部④「現代特有の病」が起こる原因を説明した次の文の空らんに十五字以内のことばを書き、文を完成させなさい。

新しい企業の製品が

(前に、世の中に広まっていくこと。

問六 I に入ることばとして適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新しさ イ 便利さ ウ 快適さ エ 素朴さ オ 手軽さ

問七 線部⑤「こんな例はほかにもいくらかもある」で、本文で言う「こんな例」にあたる「電化製品の使い方の例」を一つ、具体的な場面を設定して自分で考えて書きなさい。

問八 II に入る十字以内のことばを、本文中のことばを用いて書きなさい。

問九 本文中のポスターの中にある次のことばのうち、筆者自身が本文中で行うと述べている行動を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 注意する イ ゴミ箱の場所を教える ウ ゴミ問題について説教する

エ 自分の方に転がって来ないように祈る オ 拾ってゴミ箱に捨てる カ べつに何とも思わない

問十 本文の内容として正しいものには○を、正しくないものには×を書きなさい。

- 1 空き缶のポイ捨て問題は、流行を追いかめ、欲望を抑えられない現代の日本人に特有の問題である。
- 2 空き缶のポイ捨て問題は、老人が若者に作法やマナーをいちいち注意しなくなったことに原因がある。
- 3 空き缶のポイ捨て問題は、空き缶にどう対処するかを考える前に自動販売機が登場したことに原因がある。
- 4 駅の空き缶のポイ捨て問題の解決には、駅には缶の自動販売機を置かないという対処も考えられる。
- 5 空き缶のポイ捨て問題を解決するには、人の良識に訴えるとともに厳しい罰則を作ることが必要である。

【三】 次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを書きなさい。

- | | | | |
|---|---------------------------|---|------------------------|
| ① | アメリカの独立 <u>センゲン</u> 。 | ⑥ | 私は彼と意見を <u>コト</u> にする。 |
| ② | 祖父の <u>ジュクレン</u> した技がさえる。 | ⑦ | これはとても <u>重宝</u> な道具だ。 |
| ③ | この町は <u>エンガン</u> 漁業が盛んだ。 | ⑧ | 議会の解散は <u>必至</u> の情勢だ。 |
| ④ | <u>チヨメイ</u> な作家のサインをもらう。 | ⑨ | 遠足の <u>支度</u> をする。 |
| ⑤ | <u>ソウキ</u> 移植の問題を論じる。 | ⑩ | 新しい事業を興すのは大変なことだ。 |

問二 次の①～③の——に入る漢字一字を書きなさい。

- ① 「——を聞いて——を知る」人になってほしい。
- ② 「——変われば品変わる」というが、これにはおどろいたよ。
- ③ 「習うより——れよ」というから、まずはやってみようよ。

問三 次の中から——.——に同じ漢字が入らない四字熟語の組み合わせを一つ選び、記号で答えなさい。

ア	「 ☐ 転	「 ☐ 倒	と「 ☐ 転	「 ☐ 起
イ	「 ☐ 人	「 ☐ 脚	と「 ☐ 束	「 ☐ 文
ウ	「 ☐ 石	「 ☐ 鳥	と「 ☐ 唯	「 ☐ 無
エ	「 ☐ 寒	「 ☐ 温	と「 ☐ 再	「 ☐ 再
オ	「 ☐ 期	「 ☐ 会	と「 ☐ 心	「 ☐ 体

問四 次の中から——線部の漢字の読みが全部ちがうものすべてを選び、記号で答えなさい。

ア	元素・元旦・元値	イ	加工・人工・大工	ウ	家庭・家来・家賃
エ	計画・画家・区画	オ	代理・交代・近代		

